

「生き物供養」「何でも供養」の連関性を求めて

—日本と台湾の比較から—

相田 満 (国文学研究資料館・総合研究大学院大学)

生き物供養・何でも供養とでもいうべき、人間以外の生物や物品を祀り、供養する、多様な信仰遺物が、日本国内の随所に遍在する。その総数は不明だが、現在の所、2,600件を超える遺物を調査した段階にある。そうした中で、日本の統治下にあった台湾は、遺跡の悉皆調査に恵まれており、日本の供養の在り方と比較をするのに格好の調査対象となっている。そこで、本論では、その特性に着目した分析を試みることによって、見えてきたことを中心に分析と考察を試みる。

Looking for the linkage of "living things" and "anything"

--From comparison between Japan and Taiwan--

AIDA, Mitsuru (National Institute of Japanese Literature
SOKENDAI: The General University for Advanced Studies)

A variety of religious artifacts that worship and cherish organisms and goods other than humans, which should be called living creatures and anything but retirement, are ubiquitous everywhere in Japan. Although the total number is unknown, it is at the stage of investigating more than 2,600 relics at present. Under such circumstances, Taiwan, which was under Japanese rule, is blessed with every investigation of the ruins and it is a good investigation target to compare with the way of Japanese donation. Therefore, in this thesis, by trying analysis focusing on its characteristics, I try to analyze and consider mainly the things that have come to light.

1. まえがき

人は生きるために多くの命を奪ってきた。この営みに対して、日本人は供養と慰霊の営みを行い、そのための供養・慰霊碑、神社など様々な記念物を残してきた。中でも特徴的なのが、人間以外の生き物はおろか、何でも祀る供養碑である。

こうした生き物供養・何でも供養とでもいうべき、人間以外の生物や物品を祀り、供養する、多様な信仰遺物は、日本国内の随所に遍在する。

命を奪った生き物や不要となったモノを惜しみ、それまでの恵みへの感謝と、命を奪い、捨てるを得なかったことへの贖罪と、さらには供養者の後世の安寧を祈るのである。

そもそも、生き物や何でも供養する営みを突き詰めて考えると、古くは仏教の草木成仏観や、新しくはAIの存立基盤にまで及ぶ。

まず、物に命(仏性)があるかどうかには、平安時代から草木に宿る仏性の有無をめぐるの長い論議の歴史を指摘することが出来る。ただし、こうした教義の発生以前にも、日本では縄文遺跡に犬を埋葬した例が残されており、(例えば千葉県の加曽利貝塚[BC4000-3000C])や、文献上の初見

では、『播磨国風土記』(8C 初成立)託賀郡(たかのこおりに)、猪と戦って落命した狩犬麻奈志漏(まなしろ)を応神天皇[AD4-5C?]が悼んで墓を作った例がある(犬は今も犬次(いぬつぎ)神社に祀られている)。

このように、仏教渡来以前にも動物を葬った例もあることから、生き物の命を惜しみ愛惜する供養の伝統は延々と受け継がれていることがわかる。

後者の問題意識では、ロボットやアンドロイド、ひいてはAI等のプログラムに人格を認めるか否かの、SF作品でしか取り上げられなかった問題に直結し、科学技術の発展と倫理の問題にかかわる、未来的でありながら現代的な問題でもある。

そもそも供養は梵語プージャーpujaの訳語に由来し、犠牲や供犠(ヤジュニャ yaja)をともなう宗教や習俗と対峙する、不殺生がことさらに強調される仏教の儀礼として発展してきた。

もともとは仏法僧の三宝に供えられたものであったが、日本では死者・祖先に対する追善供養のことを特に供養ということが多く、そこ

から派生して仏教と関係なく死者への対応という意味で広く供養と呼ぶようにもなった。また生き物やモノに対しても供養が行われるようになり、特に天台本学思想で象徴的な「山川草木悉有仏生」の言葉そのままに、生あるものすべて、果てはモノまでも魂が宿ると考えられて供養の対象と化したという大まかな構図が描けるが、「供養」の厳密な定義はあえて求めている。

先述の通り、失われた命を惜しみ悼む気持ちが結実したとも言える様々な造碑・像塔・祭祀の類は、仏教渡来以前から続いているからである。たとえ祭祀が途絶しても、その営為の痕跡は碑塔等の遺物の形で残り、時に新たな供養を生みつつ今なお続いているからである。

碑塔を代表的なものとする遺物の多様さと数の多さは、それ自体が日本人の心性を象徴する現象といえよう。さらにいえば、残された碑塔の多様性と膨大は、世界的にも珍しいといっても過言ではない。

供養の対象の具体例を挙げれば、例えば生き物供養では魚鳥草木犬馬等の禽獣植物のほか魚の餌となるユムシ、シロアリなどの害虫、菌などがある。モノ供養では筆・針や茶筌（ちゃせん）などの器物類は一般的なもので、道や橋など。珍しいもので日食やロボット犬 AIBO、金屑などもある。

神仏以外の架空キャラクターも調査対象としているが、例を挙げれば人魚や里見八犬伝の犬の八房、源三位頼政に退治された鶴（ぬえ）に至っては、鶴の他に、それを射た矢も祀られており、対照のカテゴリが難しいものも少なくない。

さらに供養碑の標記にも、「供養」という表現ではなく、「記念（紀念）」と銘記されるものもあつたりする。しかし、銘文を読んでも神仏として崇める所があれば、純粋に鎮魂と感謝の気持ちのみを捧げるものなど、形式もさまざま、他の多くの「供養碑」と意義の上で変わるところはない。その意味で、定義と問題意識の設定次第では、その個数は際限なく増え続けているといってもよからう。

しかし、「生き物供養」を典型例として外国の人にこのことを伝えた知った時の反応は、必ずと言っていいほど大層驚かれる。命を奪っておきながら、その相手を供養することを欺瞞と捉えられはしないかという批判もありそうな気がするが、幸いにそのような声は未だに聞こえない。

そもそも海外にこのような営み自体がないらしい。とすれば、これも日本の特色ある文化

の一形態といってもよいのかもしれない。自分たちの国にはこうした営み自体がないというのであるから、こうした現象は、日本特有の文化であるとしてもっと積極的な発信を行ってもよいのではないのか。

もっとも、日食や金屑、AIBO 供養に至っては、日本人でさえも驚く人は少ないのだが。

本研究は、こうした供養遺物が遍在する現象を調査・取材する営みを通して、日本人の精神的・文化的文脈を解明し、後世と世界に伝えるための体系の構築と意義付けを求めるもので、研究プロジェクト「日本における「生き物供養」「何でも供養」の連環的研究基盤の構築」（JSPS 科研費 16H01760, 2016-2020 年度）として進められている。そして、その研究を進めるために構築を進めているのが、「生き物供養碑 topic map」である。

先にもふれたように、「生き物」と「何でも」の両供養についての厳密な宗教的定義は求めている。その理由は、データベースの構築と資料分析を進めてきた過程で、次第に明らかになることだが、その事時代が本研究を進める上での基本的な仮説（スタンス）となっている。

本報告は、そのことの仮説を裏付ける一端と、分析結果の紹介を行うものである。

具体的には、

A. 碑塔の地理的分布の視点から見えてくる特徴

B. 生き物・何でも供養間に認められる連関性などの2点に焦点を絞って内容の紹介を行う、

まず A においては、比較対照に台湾も加えた紹介を行う。台湾は、1895-1945 年の間に日本による統治が行われた。その間、日本と同様に屠畜場の衛生指導が強く行われたが、その一方で屠殺された家畜を供養する習慣も根づくに至った。その結果、日本の供養の習慣を美風として、屠畜場の供養碑と供養儀式が復活・保存されることとなっている。しかも、九州程度の国土面積しかない台湾は、各省・各市による歴史的文物の悉皆調査資料と現地の案内に恵まれており、実見による調査が行いやすいという事情がある。加えて、近年は、同地を選定した研究も現れ始めており、日本との比較を進めるのに最適な状況にある。そこで、日本における供養碑の状況を把握可能な事物との比較を試みた次第である。

B. については、現段階の調査資料を基にして、そこから、個々の供養碑間に有機的連関性が見られないかを読みとる試みである。すなわち、現在集積されたデータを利用して、生き物を供養する「生き物供養」とモノを供養する「何でも供養」とが、必ずしもそれぞれ無関係に存在するのではなく、地理的に近接したり、集積して集められた

りすることがある。本論では、そうした現象の紹介と意義付けを試みる。

2. データベースの概要と研究の歩み

本研究を進めるにあたっては、複数人で調査が進められるため、調査候補地の供養碑の重複を防ぎ、情報の共有をはかるために、供養碑のデータベース化と公開につとめてきた。

データベースは現在、以下の2バージョンで公開されている(制作協力:内藤求氏 [(株)ナレッジシナジー])。

【試行版】生き物供養碑 topic map3(2017.3版)
<http://tmap1.topicmaps-space.jp/kuyo3/>
 Id:aida01 Pwd:aida01!

【公開版】生き物供養碑 topic map(2017.3版)
<http://tmap1.topicmaps-space.jp/kuyo/>

データ件数は1塚1件を単位に、試行版で2,359件(公開版2,216件、()内以下同)を収める。ただし、馬頭観音のように複数碑が同一地に集積するものは1件にまとめて数えているため、たとえばペット霊園では被葬動物が犬・兎・猫ほか多岐に及ぶものや、人間と同葬されるものもまとめてペットとするなど、必ずしも精密な分類はなされていない。

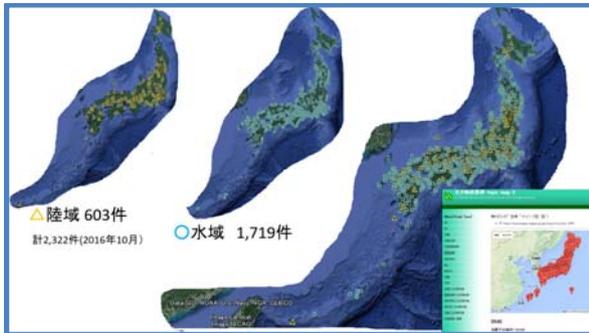


図1 陸域・水域別供養碑(計2,322件(2016年10月))

図1には供養対象となる生き物・何でも供養碑を陸域と水域とにそれぞれ分けたほか、併せたもので簡単な地理的分布で示したものである。(右下は公開ホームページの画像を示した)

塚の情報の詳細は、GIS情報と高度を記録する写真1,892枚(1,056枚)の他、参考情報90件(146件HPサイトも含む)、webサイト70件から取材した。

撮影調査にあたっては、碑の解説や取材地の情報も可能な限り撮影して採録するほか、現地の教育委員会や図書館で文献を収集するほか、聞き取り調査を行うようにしている。そのため、1碑の前での調査は写真撮影が主作業で、拓本採取や採寸などはほとんど行えてない。

その理由は、天候や交通状況により、測量や現地

での翻刻・解説作業に時間が掛けられないためである。実際の所、1碑の所在の確認と記録、周辺の調査と聞き込み等の作業を重ねる調査作業においては、1碑の記録に宛てられる時間は正味15~30分という所がせいぜいである。複数箇所の碑の調査を行う際には30分以上時間をかけて分析することは現実的ではなく、それよりも現地でしか得られない碑についての知識の聞き取りや、関連する碑の紹介を受けたりする方に多くの時間を割き、文字起こし等の作業は、後日に写真と関連資料を照合して入力する方が実効的といえる。

データ未採録の県は無いが、交通困難で撮影取材の機会を得ていない県が10件程度残っていることは惜まれる。ただし、季節によっては天候・災害などで、取材可能な時期と地域は限られており、中には動物被害の危険があるため、1人きりの調査が薦められない地域も少なくない。そのような状況下で2018年11月現在の蓄積データは供養データ件数2,637、写真枚数3,337件を数えてきた現在、ようやく道半ばに至った感を得たと

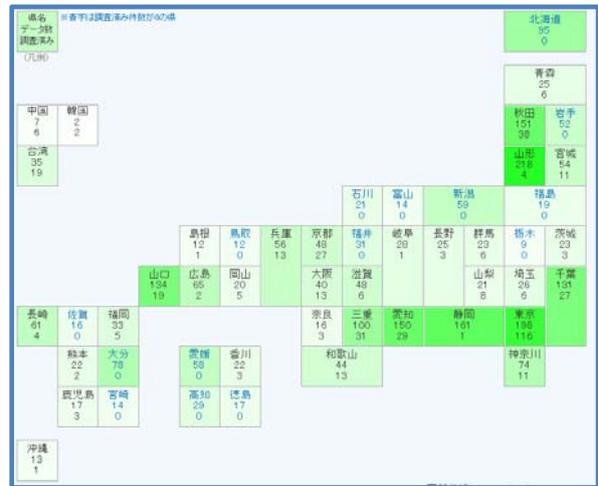


図2 都道府県別供養データ登録件数
 いうのが正直なところである。

本データベースは、当初は『魚のとむらい—供養碑から読み解く人と魚のものがたり』(東海大学出版会,2012)の著者、故田口理恵氏(東海大学)が漁協関係者から取材された400件のアンケート結果をデータベース化することから始まった。その後、『どうぶつのお墓をなぜつくるか—ペット埋葬の源流・動物塚』(社会評論社,2007)、『東海道どうぶつ物語—語りつがれる「人間の仲間たち」—』(東海教育研究所,2005)や『いきものをとむらう歴史-供養・慰霊の動物塚を巡る-』(社会評論社,2018)の著者依田賢太郎氏を協力者に仰ぎ、平22-26年度人間文化研究機構連携研究の助成を得て「生き物供養から見る自然観の変遷」研究を進め、アンケート調査地の実地検証や新規供

養碑の調査を重ね、平成29年度より現在のプロジェクトによりデータベースを育て上げている次第である。(UIやオントロジ図等の概略は既稿で触れた[1])

3. (A) データベースから得られた知見

：碑塔の地理的分布の視点から見てくる特徴

畜魂碑あるいは獣魂碑と呼ばれる碑は、日本では家畜養殖場や食肉加工場に設けられた。

一方、日本統治時代(日治時代：1895-1945)の台湾では、食肉解体処理場に設けられた。食肉解体処理場の食品解体(屠畜)の機能は戦後も受け継がれ、多くの食肉加工場の敷地内には屠殺された家畜の霊を慰める石碑が設けられた。

片倉佳史[2]によれば、新北市淡水区の畜魂碑は月に2回碑前で供養祭が今も営まれているという。日治時代に日本人関係者達が営んでいた儀式を美風として今に受け継いでいるのである。

もともと、中華民国政府による台湾統治が始まった当初は、日治時代の記憶を消すために毀損され、日本元号が記された碑の昭和元号が削られたものが多かった。大陸も同様で、真辺将之[3]の調査によれば、現在の中国に獣魂・畜魂の慰霊碑は既に現存しないという。

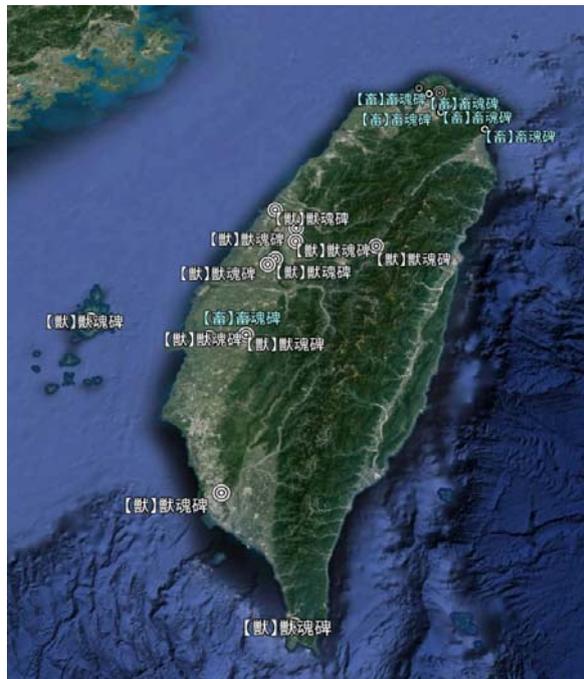


図3 台湾の【獣】(白)魂碑と【畜】(黄)魂碑の分布

台湾に現存する畜魂・獣魂碑類は32基。一部は博物館の収蔵庫にありはするが、残存状況を地図上に宛てると、畜魂碑は北部に、獣魂碑は台中以南に集中することがわかる。台中地方(正確には嘉義)に孤例の「畜魂碑」があるが、これは1932

年以前に嘉義市屠畜場内に設置[4]されていた碑のデータが拾われた物で、当該碑は既に無く、現在この地区の碑は全て「獣魂碑」である。

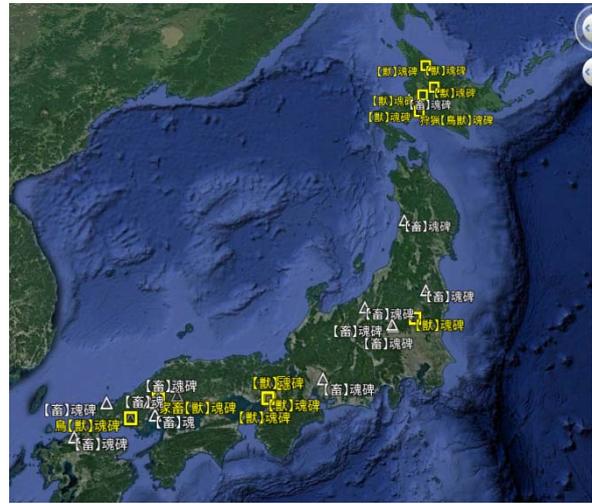


図4 日本【獣】魂碑口と【畜】魂碑△

対して日本では、筆者の調査の及ぶ範囲では獣魂碑12基、畜魂碑16基が確認されている。母数の不足は重々認識しており、台湾のものとは比べて悉皆とは言えない現状ではあるが、それでも【畜】魂碑と【獣】魂碑の地域的偏在が現れている。

すなわち、獣魂碑が関東や北海道などの東日本に多く、畜魂碑が広島県を中心とする西日本に多いことである。この遍在の類似性の現れの分析に、厳密を期するならば、碑文に記された人物など入植者の出身地の精査を要するが、大まかの仮説としては、台湾入植が北部の宜蘭県から始まったことを考慮すれば、台湾北部地方に遍在する「畜魂碑」の表記の方が古いといえる仮説が導かれる。



図5 日本【獣】魂碑 (JA前橋大胡)

なお、大陸・朝鮮のものは毀損・廃棄されたものがほとんどであったが、幸いに康徳8年[1941]11月20日(満州帝国年号)の「畜魂碑」があることが概要論文提出後に判明した[5]。

4. (B) データベースで示す知見 : 生き物・何でも供養間に認められる連関性

「何でも供養碑」に「生き物供養碑」の意味合いが込められていることは、たとえば「庖丁供養」は、庖丁で料理された生き物の命への報謝が、「筆供養」は、筆の材料となった動物類(狸・兎等)を悼む意図が込められていること等は容易に想像されよう。

それに対して、道や橋の供養にも生き物供養の意味が込められている事が発見できたことは、本研究の大きな成果であった。このことは、古くは大化2年(646)の紀年を持つ宇治橋断碑の碑文からも指摘できるほか、慶長5年(1600)の多摩六郷橋の供養願文ほか、近世期と思しき「馬橋牛/供養塔」の存在は、疑いようも無く「モノ」と「生き物」供養の連関性を証拠づけるものとなっている[6]。



図6 牛橋馬供養塔(奥多摩市)

辞書の説明には、「橋をかけ終わった時、橋の上で供養をすること。また、その供養。橋の供養。」(日本国語大辞典)や、「架橋工事が終わった後、其の橋上で行う法会」(大漢和辞典)などとあり、『古事類苑』地部の橋の項には橋供養とその下位に橋祈祷・橋祭が配されることは、その祭儀はよく知られていたことを物語っている。

橋供養は特に埼玉県を筆頭に膨大な数の碑

塔が残されていることも特徴的である。最古ものでは646年(大化2)紀年を持つ宇治橋断碑にまで遡り得るだけでなく、現存の供養碑も埼玉県を最多として2,000基を超える橋供養碑が現存している[7]。

多くの供養碑は「橋供養」あるいは「橋供養塔」を碑面に明記するが、近代以降には「記念碑(記念碑)」等の記載も見られ、宗教色を薄めた記載となっているが、かつて行われた法会等の営みが記念祭に置き換わったものといえ、建碑の意識に変わりはない。

残存する碑文や願文・表白の文言から橋供養の趣旨が読みとれるのも、橋供養を象徴的なものとして、生き物供養と何でも供養が決して無関係ではなく、モノの供養が基本的に生き物(特に牛馬)への供養と不即不離の関係で連綿と続いていることの証左である。

造橋修路死後転/世子孫代代興旺/多福長寿とは、国立歴史博物館蔵(台北)蔵の「十殿閻王:第六殿卞城王」(登録号:73-00098)だが、橋を造り、道を修理することが功德になることが十王図の第6卞城王(變成王)に示されている。対して、日本では、その功德が牛馬を渡河の苦難から救うことへの功德になることが、宇治橋断碑以来連綿と受け継がれている。

これは文字資料の記述からも導き出せるが、データベース上でも、馬頭観音と橋供養碑の位置が近接していることからわかることがある。公開データベースでは用例が多くなった時のために、組み合わせ検索の検索結果をナビゲーションメニューに加えることを予定している。

現在はSQL文による問合せ文例を用意している程度に止めているが、特に関東に多い橋供養碑の存在をヒントに、対となる馬頭観音の存在を探索するための手助けや、逆に橋供養碑の存在から馬頭観音の存在を予測する補助的機能を果たすこととなろう。

5. (B) データベースで示す知見2

: 建碑件数別の整理

図7は2015年公開データ(1,225件)で集計した成立年別の供養碑建立件数の推移である。こちらも公開データベースでは、メニューを立てて簡単に一覧表が作成できるようにした。

そもそも動物と人と同じ葬地に葬るようになったのは、明暦の大火(振袖火事:明暦3年1月18日~20日[1657年3月2日~4日])がきっかけと言われる。しかしながら、残存する建碑からはその傾向は読み取れず、必ずしも同葬することへのタブー意識への箍(たが)が外れること

と、生き物供養の流行とは連動していないことをこのグラフは物語っている[8].

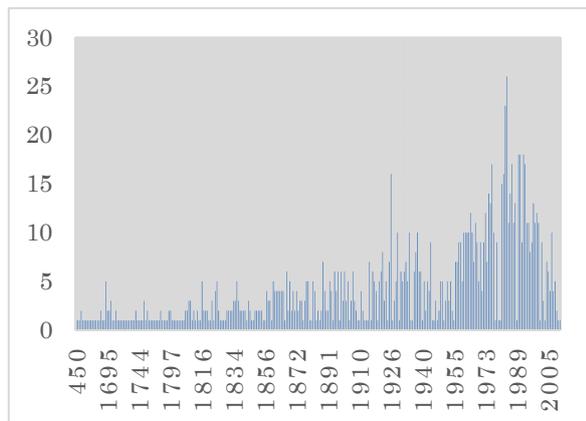


図7 年別築碑件数 1,225 件
(X 軸：西暦 Y 軸：件数)
(2015 年公開データによる)

09-24).

[5] 遼寧省瀋陽市皇姑区

http://blog.sina.com.cn/s/blog_625913ce0102vm6i.html. (参照 2018-09-24).

[6] 相田満: 橋の記憶一幻ではなかった慶長五年竣工の多摩六郷橋一, 東洋研究 203, 大東文化大学, pp35-71, (2017)

[7] 埼玉県の橋供養碑

きまぐれ旅写真館・埼玉県の橋供養碑第 8 回

<http://www.geocities.jp/fukadasoft/bangai5/kuyou/lists.html>(参照 2018-09-24)

[8] 大道寺友山 (江戸初期の軍学者)『落穂集』巻 8・西の年大火之事にある以下の記述. 「五七日が間には所々方々に有之焼失の者の死骸斗(ばかり)にあらざ牛馬犬猫の死骸迄も残りなく一所に持寄埋て置候. 以後寺社奉行中へ被仰付常念仏堂を御建立被仰付唯今の無縁寺是成」無縁寺とは現在の両国回向院で、この条は保科正之の見聞譚を語る享保 12 年 (1727 年友山 89 歳時) の昔語りを示している.

5. まとめ

以上、現段階のデータで分かることをまとめて記した。膨大なデータを再検証していく内に分かったことを、いかにして表現するかについては、今後も新たな発見をメニューに加えて、より分かりやすく説明を重ねる必要があるだろう。

データの積み重ねと、そこから導かれる結論とをいかに分かりやすく表現するか。今後は、検索結果から特徴ある事象をよりビジュアルに伝える工夫を目指すことと、それをデータベースに連動させること。

このことこそが、この取り組みを長続きさせるのに必要なことと思えるのである。

参考文献

[1] 相田満: 日本における「生き物供養」「何でも供養」の連環的研究基盤の構築, 情報処理学会論文集「人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん)2016」, pp177-182,(2016)

情報処理学会. 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集. 情報処理学会, 2018 (印刷中), 300p

[2] 片倉佳史: 台湾に生きている「日本」, 祥伝社, pp94-97, (2009) “論文誌ジャーナル (IPJS Journal) 原稿執筆案内”.

https://www.ipsj.or.jp/journal/submit/ronbun_j_prms.html,

[3] 真辺真之: 日本統治時代台湾の動物慰霊碑—畜魂碑・獣魂碑を中心に—, 早稲田大学大学院文学研究科紀要 62, pp650-624,(2017), 入手先

(<http://jairo.nii.ac.jp/0069/00036646>) (参照 2018-09-03).

[4] 台湾日日新報 (漢文版): 1932 年 9 月 19 日. <https://www.ipsj.or.jp/copyright/ronbun/>, (参照 2018-